

迷いながらたどり着いた牧師像

檀原久由

文芸評論家の富岡幸一郎は、著書「使徒的人間 カール・バルト」の中でこう記す。

「神学生であったころのバルトは、この自由主義神学と、その聖書注釈の方法を正当なものとして受けとめ学び、そこから20世紀のキリスト教宣教を荷って牧師として出発したのだった。ところが、今やその同じ牧師は180度方向をかえて、彼の時代の神学と思想の流れの外へ出て行った。ちょうど400年前に宗教改革者たちが、中世という家から出て行き、立ち去って行ったように、この一人の牧師は、近代という家から、突如として出て行った。彼は自由主義神学や新プロテスタント主義というキリスト教と当時の教会からだけでなく、時代そのものからでて行った。

何が彼をして外へ追い立てたのか。彼は何処へ向かって出発したのか。あきらかなのは、新しい神学や思想がそこで問題になったのではないということだ。根底において全く新しいことではなく、くりかえし新しく見直され、理解されてきたもの——宗教改革者たちにとってそうであった熱烈に古きもの——使徒パウロの書簡の背後から、カール・バルトに向かって吹きつけてきたものとは、それである」(1)。

私には、富岡が指摘したバルトに起こったような、劇的な牧師を見つめ直す出来事はなかったけれど、聖書に向き合い聖書を語る者として、牧師のあり方について迷いながら模索してきた行程があった。そこで、教会の歴史を意識する中で、私なりの牧師像にたどり着いた思いを簡単に記してみたい。

私を含めて、日本人キリスト者は長い間、人口の1%という壁を感じつつ信仰生活を送ってきたと思う。教会も牧師も信徒も、大きな犠牲を払いながら宣教の動きを担い、苦闘する中で、日本の宣教に対するさまざまな取り組みを模索してきた。福音主義の教会においても、福音の文化脈化・土着化という言葉で表現される、日本文化や風習への対応を視野に入れた活動に関心が高まっている。礼拝でのワーシップソングなどの活用も礼拝改革を意識した試みであると共に、私たちの時代を意識した宣教活動にあたると言えるだろう。教会がNPO法人の設立にかかわったり、教会の建物を地域活動に開放したり、カウンセリングや福祉活動などを宣教活動の一部ととらえる考え方が定着しているのも事実である。背景には、牧師自身も時代そのものを意識した、社会とのかかわりの中から日本の宣教に対する新しい切り口を開こうとする狙いがあるだろうし、宣教に対する閉塞感の打開という面があるのも否定できない。

アリストアー・マクグラスはプロテスタンティズムの歴史的な変遷を分析する中で、プロ

テスタントの特質を「一致と分裂」と捉えて、「誕生、成熟、老化、死、刷新」というパターンが繰り返し起きていることを明らかにする。宗教改革者たちの主張にも同様な認識があったので、自己を見つめ直し、革新することがプロテスタンティズムの特徴であることは否定できない。プロテスタンティズムは、一方では時代や環境に反応し、他方では多様な聖書の解釈を生みだしてきた。マクグラスは教会の歴史を通して、教会内における資源に基づいた、刷新、革新、改革を行うユニークな内的な能力が教会にあることを考察して、「プロテスタンティズムの将来は、まさにプロテスタンティズムが実際にプロテスタンティズム本来の姿を採ることのうちにある」(2)と結論付けている。

それでは、本来の姿とは何を意味するのだろうか。

インドで長年宣教師として活動したレスリー・ニューピギンは、母国イギリスに戻ってみると、イギリスが宣教の対象国となってしまったという現実には驚かされた。彼は、宣教の意味を個人の回心という点に関心を払う人々（教会派）にとっても、神の正義のための行動として社会の不正や貧困の改善を目指す人々（社会派）にとっても、相互不信になって切り離された状態では、それぞれの持つキリスト者としての特質を失うだけでなく、そこから生み出される各種のプログラムも本来の性格を失うと危惧する。お互いが率直に論議しなければ、「正義と憐れみ・共苦のためのキリスト教的プログラムは、礼拝と聖礼典という教会の命のうちに、その根を有することから切り離されてしまう。その結果、それらのプログラムはキリストの現臨のしるしとしての性格を喪失してしまうのであり、自己義認的なものとなり得る道徳心によってかき立てられた、単なる改革運動のようなものになってしまう危険がある。またもう一方では、教会の周囲に存在する世俗社会と苦しみを分かち合う奉仕を行うことによって教会の持つ性格をふさわしく表現する、ということから切り離されてしまうなら、礼拝共同体の生が、教会員の求めや願いにのみ仕える自己中心的な存在となる危険を冒す」(3)ことになりかねない。

宣教師の経験を踏まえて、彼は、相手に敬意と尊敬の念を持ちながら、信仰的立場の違いの中での議論に真理を見つけ出そうとする意義を解き明かす。そして、教会の宣教の本質の議論に必要なのは「神学的な理解」を出発点に挙げる。「イエスは主」という信仰告白こそエクレスシアという用語が提供する概念であり、ローマ国内で福音が告知されて集められた人々の行動原理でもあったことを私たちに思い出させる。それは、啓蒙思想によって形成された西洋文化の価値観や思想から生まれたものではなく、聖書、教会の信仰告白、礼拝、聖徒の交わりなどから生まれてきた、信仰的行動原理である。

彼のインドでの経験は、他宗教・他思想を信奉する人々との対話において、お互いに自分の持つ観点・信仰から相手を見るという事実・現実を認識させただけでなく、キリスト者との対話においても、キリスト者自身が信仰の危機を経験することになる場合が起こるからこそ、主イエスへの信仰の質が問われると語る。キリスト者自身が自分の確信とは何

かを意識させられる場合が出てくる。自分の信仰や信念が自分の思考と行動の基本原理となるとすると、諸宗教の中に生きる「キリスト者は他宗教を信じる隣人と、イエス・キリストへの自分たちの確信に基づいて、出会うのである」(4)という、彼の見解が妥当に思える。立場の違う相手との対話において、相手に敬意を払い、大切に理解しようとする努力や思索、自己を見つめ直す出来事が起こるからこそ真の対話が生まれるのであって、恐れることなく聖霊の助けを期待し、信じて対話の中に入ることを勧める宣教師としての彼の態度に、主を信じる者であれば同意出来るのではないだろうか。

ユダヤ人哲学者 M・ブーバーも他宗教の人々との対話主義を大切にし、それを実践する中で、自分の宗教的確信「我と汝」という人格的神関係を土台に置いた(5)。

スタンレー・ハワーースとウィリアム・H・ウィリモンは、その共著「旅する神の民」の中で、米国におけるキリスト教のあり方に挑戦的なメッセージを送った。「いずれの教会も、アメリカ社会における教会の最優先課題が、アメリカ民主主義を保証していくことだと認識している」(6)ことに警鐘をならし、教会と社会とが妥協的な関係に甘んじて緊張関係を欠いた姿を批判する。彼らは、「神学的問いとは、イエスの出来事を単に近代的なコンセプトに翻訳することではなく、むしろ、この世を彼に対して翻訳することである。神学者の仕事とは、近代社会に福音を適合させるのではなく、福音に対して近代社会を適合させていくこと」(7)なので、教会は異文化における「旅する神の民と呼ばれるコロニー」として独自の価値基準を持つべきだと主張する。ファンダメンタリストも自由主義神学者も、両者の聖書解釈は近代の合理主義に影響された個人主義や実存主義によりかかっていることを見抜いた二人は、教会が歴史的に保持してきた聖書解釈を抜きにしたり、教会の聖礼典を軽んじたりしないで、「教会が神についての言語を具体化する人々の共同体である」ことと、主日礼拝こそキリストの真理を思い出させる最も明らかな教会的手段と位置付ける(8)。その意見は日本において意義を見出すだろう。

倫理学者ジョン・ヨーダーは、教会と政治、礼拝と日常生活という二つの領域とを結びつける努力を試みた中で、キリスト者共同体における礼拝・独自性が異文化社会を変革できる力となると論じた。彼はリチャード・ニーバーに学びながら、ニーバーの「キリストと文化」の中で明らかにした5類型を批判研究し、礼拝における聖礼典の執行の意味を一般社会での慣行や用語と結び付けて説明しながら、「それらは神の行為なのだ。人々によるこれらの行為の中で、これらの行為とともに、これらを通して、これらにおいて神は行動する。これらのことが行なわれる時、神の民はこの世において真に神の民となる」(9)と述べた。彼は礼拝における神の臨在を一般の社会生活や活動と結びつけて解釈し、礼拝の特異性から生まれる倫理的意義を明らかにして、そこから一般社会の倫理領域に進む方向性と変革を試みた。そこには、個人主義が蔓延する米国社会にあって、和解に向けての対話

を作りだす機能を教会が取り戻すようにとの願いがある。

宗教改革者のルターやカルバンは、神の言葉が説教され、 sacrament が正しく執行されるところを教会の定義とした。彼らは教会制度を否定したり、教会が市民社会から切り離されたりすることには賛成しなかった。より急進的な改革者は、社会から教会を切り離して世の墮落の影響から教会を守り、聖徒の交わりの意味を限定的に捉え、規律による信仰の純化を目指した行動に走ったことは、歴史が示す通りである。その教会観には4世紀に論争となった、ドナティストの教会観と酷似する思想がある(10)。宗教改革者たちは、礼拝での説教と聖書の権威を確立することを目指し、聖書が信仰と実践についての最高の権威と認める原則を守ろうとする一方で、過去の教会の良き伝統は教会の礼拝においても、信仰生活においてもしかるべき価値を与えた。

教会史家のJ.ペリカンは、16世紀のほとんどのキリスト教教理の言明に「信仰告白」という表題が使われていたという事実そのものが、イエス・キリストの教会が神の言葉に基づいて信じ・教え・告白する事柄という、キリスト教教理の中心性を示す証拠と言った。しかし、それらの内容は決して新しいものではなく、教理の発展の歴史の過程における、定式化・再解釈化の現れに過ぎないことを提示した(11)。

アタナシオスが「アントニオ伝」で描いた、砂漠での禁欲者・隠遁者の出現が起こった頃、エウセビオスは3世～4世紀当時の教会における状況を述べている。それによると、教会には二つの生活の規範があって、一つは通常的生活様式とは全く別の、神のみに仕えるように実践する生き方、もう一つはキリスト教信仰と調和可能な、市民として国家や社会での義務や権利を拒否しない、あらゆる点で市民としての責務を果たす生き方であった。ただし、それには主への敬虔と献身の念を保つという固い決意の上でなされるという、条件が付けられていることに注目したい(12)。異教の世界に住むキリスト者は、聖と俗という概念とそれに付随する信仰生活の様式を認めながら、キリスト者としての主への献身と信仰が第一に問われることを忘れてはならない。

時代とともに、「牧師という主に仕える職務にある者の本質は変わるのだろうか」という問があがるならば、「恐らく変わりはない」と私は答えるだろう。なぜなら、カトリック神学者キュンクが「使徒的継承」と呼ぶ内容にかかわるからだ。彼は、キリストの教会ではすべての信じる人々が、司祭・霊的な人々・聖職者であることを認めた上で、牧者は「共同体の公事のために特別な方法でこの役務職を遂行する全権を委ねられた者として合法的に認められた」(13)者と語り、共同体が牧者の働きが福音に忠実かどうかチェックする責務があることを明らかにした。更に、主が牧者を立てたということを共同体の人々に自覚

させるために、共同体に対する公の奉仕職への特別な召命手続として、祈り、按手、叙階式がなされることを、教会の発展の過程を考察して論証した。その結論として、彼は、牧会職の本質、形態および機能を「使徒的継承」と呼んで、「第一義的には使徒の信仰と信仰告白における継承ならびに使徒の奉仕と生活における継承」(14)を意味することを解き明かした。宗教改革者たちが受け取った使徒的信仰の内容がこのことに結びつくからこそ、歴史をたどる中で、220年までに書かれたとされる(15)、現存する最古の司教の叙階定式を伝えるヒッポリュトスの「使徒伝承」に目を止めることは、牧師とその使命の意味を考える上で必然的に思える。

アウグスティヌスのドナティスト論争を踏まえた上で、ウィリモンは著書「牧師」の中で、「教会は、その最善の理解において、牧師という職務のもっとも確実な基礎は、人格的なものや社会的なものではなく、神学的なものに由来することを信じてきた。すべては神と教会からの召命において始まり、またそこで終わりを告げる。」(16)と述べて、牧師のアイデンティティを神学と歴史にかかわる事柄から論証するために、ヒッポリュトスの「使徒伝承」の叙階典礼式から解き明かしを始めている。そして、教会こそが自分を任職した源泉であり、「キリストの体なる教会」が目に見えるような成果や報いが与えられなくても、神が教会の勝利を意図していると感じることで、牧師としての働きを全うすることができると語る。「私に言わせれば、こうしたことのゆえに、教会における共同の礼拝こそが、聖職者の一貫性を保つ上での偉大な源泉となるのである。ほとんどの日曜日において、私は礼拝の中で会衆を導くことに忙しく、自分自身が神を礼拝するという面において不十分であるように思っているのだが、しかし、それでも私は礼拝している。」(17)という彼の言葉に、私は同意する。

私たちは、教会での礼拝奉仕から、社会の中でのキリスト者としての証や行動など、牧師には様々な働きが要求されることを知っている。どのような活動であっても、キリスト者は主への真実な信仰告白と実践が求められるからこそ、社会や国家のあり方に強い関心をもって行動するし、更に、世において神の正義の確立や福祉の実現に奔走することを優先する牧師がいても、非常に意義があることと思うだろう。それはキリスト信仰による、主と社会との和解のプロセス、回心にあたると言えるからだ。

その上で、私は、教会という「キリストの体」に寄り添う形での奉仕を常に優先する者でありたいと願う。キリスト者を悔い改めに導き、神との和解を得させ、社会との和解のかけ橋になれるような信徒・教会を作りだす者として、「神は、み言葉と sacrament だけでなく、私たち牧師の教えや門安、説教、そして会衆に対する配慮といった行為の中にも臨在するという信仰、こうした信仰が牧師の歩みを守り導く」(18)と信じるからだ。

(日本ホーリネス教団・安城キリスト教会牧師)

(注)

- (1)富岡幸一郎『使徒の人間 カール・バルト』(1999年、講談社) 第1章 p11-12
- (2)A.E.マクグラス『プロテスタント思想文化史』(2009年、教文館) 第17章
プロテスタンティズムの将来に影響を与えると考えられる傾向を3つ挙げている。①プロテスタントのアイデンティティに関する理解を変えること、②聖書解釈のパターンを変えること、③中央集権的制度が生じそうになると離れる傾向。
- (3)レスリー・ニュービギン『宣教学入門』(2010年、日本基督教団出版局) 第1章 p25
- (4)『宣教学入門』第10章 p265
- (5)平岩善司・山本誠作編『ブーバーを学ぶ人のために』(2004年、世界思想社) 3 対話主義の歴史について/ヘブライ的な宗教伝統と対話主義(山本幸誠作)
- (6)S.ハワーフス、W.H.ウィリモン『旅する神の民』(1999年、教文館) 第1章 p31
- (7)『旅する神の民』第2章 p42
- (8)『旅する神の民』第7章
- (9)J.H.ヨーダー『社会を動かす礼拝共同体』(2002年、東京ミッション研究所) 第6章
リチャード・ニーバーはキリスト教が成立して以来、その文化との関係を省察・整理して5つの類型にまとめた。①文化と対立するキリスト、②文化のキリスト、③文化を超えたキリスト、④緊張関係に立つキリスト、⑤文化の変革者としてのキリスト
- (10)A.E.マクグラス『キリスト教神学入門』(2002年、教文館) 第15章、迫害によって棄教した司教の sacramentの有効性が議論になった。Sacramentの有効性は、執行者の個人的な資質によるのではない。エクス・オペレ・オペラート：なされた行為によって有効で、それはキリストの恩恵による。
- (11)J.ペリカン『キリスト教の伝統 教理発展の歴史第4巻』(2007年、教文館) 宗教改革、その定義
- (12)K.S.フランク『修道院の歴史』(2002年、教文館) 第1章、Eusebius/ Demonstratio Evangelica I 8、エウセビオス、カイサリア主教・教会史家 340年頃没
- (13)ハンス・クンク『教会論 下』(2003年、新教出版社) 第5部2章「奉仕としての教会の役職」の中で、信徒は誰でも伝道できるが、共同体に対する公的奉仕職は特別な主からの召命という性格を考える必要があり、共同体における公的行事を執行するので、共同体が権能を授けていると理解する。共同体は共同体に関するあらゆる問題に発言権を持つ。
- (14)『教会論 下』p298
- (15)J.ダニエル、上智大学中世思想研究所編訳/監修『キリスト教史 1』(1990年、講談社)
第11章 ヒッポリュトスの項目、「使徒伝承」などの多くの著作を残したローマの司祭・神学者
- (16)W.H.ウィリモン『牧師』(2007年、新教出版社) 序文、ヒッポリュトス 235年頃没
- (17)『牧師』第13章 p499
- (18)『牧師』第13章 p502

